《論　文》

平林たい子と彼女の「満洲」体験物語

―作品における空間の意味と機能をめぐって―

楊　　佳　嘉

１．はじめに
２．顕在化する植民地化された空間
　　――「投げすてよ！」における「鉄道公司」をめぐって
３．潜在化する植民地化された空間
　　――「施療室にて」における「慈善病院」をめぐって
４．両作品における空間の移動の意味と機能
　　――女性主人公のアイデンティティの変化との関係性
５．おわりに

１．はじめに

一九二四年、平林たい子は、当時の恋人であったアナキスト山本虎三との生活が進退極まり、大連に落ち延びた。二人は大連のある馬車鉄道会社に就職し、平林は女中となり、山本は中国人苦力の監督の仕事に従事した。やがて山本は不敬罪で検挙、投獄され、平林は大連慈恵病院で出産したが、栄養不良で子供を失い、救世軍婦人ホームでしばらく身を寄せた後帰国する[1]。その体験を素材にした作品は「投げすてよ！」（『解放』、一九二七・三）と「施療室にて」（『文芸戦線』、一九二七・九）である。二編の作品は、同じテーマをもち連続性が認められる[2]。

昭和に入ると、日本の女性作家たちは「満洲」へ旅行に行き、旅行者として「満洲」体験を語り始めた。例えば、与謝野晶子は一九二八年に満鉄の招待を受け、「満洲」へ旅行に行った。その体験を語る紀行文は『満蒙遊記』（夫の寛と共著、大阪屋号書店、一九三〇）である。同年に、吉屋信子は自費でヨーロッパへ旅する途中で、「満洲」を経由し、そこ

1　平林の「満洲」体験について、平林たい子『砂漠の花　第一部』（光文社、一九五七、六六-一一二頁）と山本敏雄『生きてきた』（南北社、一九六四、六六-八三頁）を参照した。

2　田中益三『長く黄色い道――満洲・女性・戦後』、せらび書房、二〇〇六、三〇頁。

での見聞を『異国点景』（民友社、一九三〇）の中に記録した。林芙美子も一九三〇年に、自費で初めての海外旅行として中国へ行った。最初の上陸地は「満洲」で、その体験を、「哈爾賓（ママ）散歩」（『改造』、一九三〇・十一）や「愉快なる地図――大陸への一人旅」（『女人芸術』、一九三〇・十一）などの紀行文で語った。だが、平林たい子の「満洲」体験は、彼女たちと質が違う。彼女は、恋人との生活を打開するために不本意ながらも「満洲」へ行き[3]、そこでの体験を紀行文ではなく小説の形で語り直した。しかも、一九二七年という早い時期に「満洲」物語を発表しており、女性作家の「満洲」語りのパイオニア的存在だといえよう[4]。女性作家というカテゴリーにおいて、近代の日本人作家の「満洲」体験を論じる際、平林たい子の存在は注目に値するだろう。

自分自身の「満洲」体験が投影された「投げすてよ！」と「施療室にて」について、同時代評では両作品とも女流作家という点に視線が向けられ、おおむね好評だった[5]。とくに、「施療室にて」は黒島伝治の絶賛を得た。平林たい子自身も「立派なプロレタリア、リズム作家」として高く評価され[6]、プロレタリア文壇での地位を確立した。

先行研究では、「投げすてよ！」論は少なく[7]、「施療室にて」のほうが注目されてきた。「施療室にて」の先行論は、枚挙にいとまがないが、女性主人公が闘争する女性になるというアイデンティティの問題をめぐって、次のような論がある。女性主人公の妻としての立場に着目した論として、小原元は夫婦関係より高い志向、つまり解放闘争のために必死で反発する「妻」の造形を高く評価[8]し、石川奈保子は夫婦の愛情＝性的関係性を媒介にして、妻が運動主体となっていく過程[9]を分析している。妻ではなく、母の側面に注目した論もある。西荘保は作中の子供の誕生と死の作用を分析し、母と死んだ子

3　平林たい子は、自伝的小説である『砂漠の花』において、若頃の自分の恋人との大連行きは「非常に不本意だった」と述べた（平林たい子『砂漠の花　第一部』、光文社、一九五七、八六頁）。

4　同注2、田中前掲書、十二頁。

5　たとえば、青山倭文二は「投げすてよ！」における「透徹した審美観」を評価し、女性作家平林に対する敬服の意を表明した（「三月号創作批評」、『文芸市場』、一九二七・四、六六頁）。板垣直子は「投げすてよ！」などの作品を例として取り上げ、平林を女性作家の中の特殊な例として、男性作家にも劣らないほどの卓越した作家であると高く評価した（「新興女流作家」、『女人芸術』、一九三〇・九、九七-九八頁）。「施療室にて」の特徴として、作品における女性ならではの「洞察力」と「心理的機敏性」（金熙明「二月のプロレタリア文学」、『前衛』、一九二八・三、八六頁）や、闘争する女性の姿の描写（雅川滉「平林たい子氏著短編集　「施療室にて」読後感其他」、『新思潮』、一九二八・十一、四六頁）などの点に作品の価値が認められている。

6　黒島伝治「『施療室にて』――平林たい子短編集――」、『文芸戦線』、一九二八・十一、六一頁。

7　管見の限り、「投げすてよ！」についての詳しい分析は、後述する田中論のみである。

8　小原元『批評の情熱』、雄山閣、一九四八、七〇-七一頁。

9　石川奈保子「平林たい子における＜身体感覚＞と＜思想的決意＞の軌跡――〈閨房的リアリズム〉の獲得――」、『国語国文研究』、北海道大学国文学会、一九八一・二、五六-六八頁。

供の関係に、産む性である女性の闘争の困惑と反撥を示したと指摘している[10]。リンダ・マリーエ・フローレスは、母が子供を殺す行為には、産む性である女性の身体化された主体性（embodied subjectivity）の獲得の意味があり、家父長制を転覆する効果があると主張した[11]。また、倉田容子は主人公の授乳行為を、「私」が置かれている経済状況とその状況の中で「私」の内部に生起する主義と感情の鬩ぎ合いであると解釈し、そこに公（階級問題）と私（女性問題）のどちらを上位に置くのかという領域区分を無効化した「理知」と「意志」のフェミニズムを見出した[12]。妻と母の両方を視野に入れたものとしては、「施療室にて」だけでなく、「投げすてよ！」と合わせて、女性の苦悶を描いた作品として捉えた、田中益三の研究が挙げられる。田中は「投げすてよ！」における「満洲」体験を通した女性主人公の愛情の問題を、事実レベルを闘争レベルへと置換、昇華する表現とした上で、「施療室にて」では、子供の死によって、植民地でいっそう絶望に駆られた女性主人公＝たい子の絶望的な感情が表現されたと解釈している[13]。

以上、女性主人公のアイデンティティの問題について、先行論では、主として妻と母のいずれかの側面から運動の主体への変化が読まれており、断片的に論じられる傾向が強い。田中の論は両者について論じるものであるが、両作品を連続的に捉えるのならば、妻と母の経験のほかに、女性労働者の問題を見逃すわけにはいかない。本論で論ずるように、両作品の特徴は、複数のアイデンティティが生じ、接続していく点にある。その点を見落とすと、平林たい子の「満洲」体験物語における女性主人公のアイデンティティの問題が単純化されやすく、その変化のプロセスの全体像も明らかにならない。また、岡野幸江が指摘しているように、平林の大陸を舞台にした初期の諸作品の特徴は、民族問題への配慮、日本帝国と植民地の関係が、階級とジェンダーの視点で洗い出された点にある[14]。両作品はともに女性主人公の「満洲」体験を語る作品であるにもかかわらず、従来の先行論では、作品の私性（たとえば、女性主人公自己の生と性の問題）に注目する傾向が強く、植民地性の問題を看過してしまっている[15]。さらに、両作品は平林たい子の実体験に基づいた作

10　西荘保「平林たい子「施療室にて」論――喪失される子供の視点から」、『福岡女学院大学紀要・人文学部編』（十五）、福岡女学院大学人文学部、二〇〇五・二、九七-一一四頁。

11　Linda Marie Flores, *Writing the Body: Maternal Subjectivity in the Works of Hirabayashi Taiko, Enchi Fumiko, and Ōba Minako*, University of California Dissertation, 2005, pp.24-87.

12　倉田容子「「理知」と「意志」のフェミニズム――平林たい子の初期テクストにおける公／私の脱領域化――」、『日本文学』、二〇二〇・一一、二-一一頁。

13　同注２、田中前掲書、十五-三二頁。

14　岡野幸江『平林たい子――交錯する性（ジェンダー）・階級（クラス）・民族（レイス）――』、菁柿堂、二〇一六、十七頁。

15　植民地性の問題について、岡野は「投げすてよ！」において、平林の鉄道敷設の現場体験が、中国人労働者を描く上で大いに採り入れられたと言及したが、植民地性の表象としての中国人労働者を登場させる意味を究明していない（岡野幸江「帝国の狭間で消された記憶――平林たい子・『敷

品であるが、かなりのフィクションを交えたものであるため、私小説としての側面だけからの読解は避けるべきだろう[16]。本論考は、両作品を植民地物語として捉え、たい子の実体験と小説の虚構の部分の差異に注意しつつ、作品における植民地性の問題と主人公のアイデンティティの関係性に注目し、「満洲」で生きる日本人女性主人公の複数のアイデンティティの浮上と、そのゆらぎや変化のプロセスを分析する。

その際、とくに注目したいのは物語における空間である。両作品を連続的に捉えることで見えてくるのは、その空間の移動に伴って、女性主人公のアイデンティティの変化が描かれているということだ。女性主人公は、一つの空間にとどまっておらず、ストーリーの発展に伴い、様々な場所へと移動することによって、アイデンティティを変化させている。

アンリ・ルフェーヴルによれば、空間は受動的なもの、空っぽのものではなく、諸関係の生産・再生産物である[17]。芸術創作は現実の空間の実践に基づき、空間の表裏における権力と知識に制限されるが、芸術家の想像力によって諸物を象徴的に利用するゆえに、支配された、受動的に経験された物理的空間を覆いつくし変革することができる[18]。つまり、物理的空間の経験が作品の中で再現される際、作家の想像力によって新たな関係が再生産されると言えよう。また、スーザン・スタンフォード・フリードマンは、小説の中の空間に目を向けると、空間が文化的な位置付けを示すための比喩、物語の発展を推進する動力として機能すると指摘する。人々の移動はアイデンティティの構成要素であり、それゆえ、文化的アイデンティティの生成を分析する際には、場所（位置）と旅程の一形態が必要とされるという[19]。

本論考は上記二つのアプローチを踏まえ、両作品の構築における空間の配置と主人公の空間の移動に着目し、その意味と機能を分析する。「満洲」という植民地における民族・階級・ジェンダーによる複数の力学が、女性主人公のアイデンティティの変化の過程にどのように連動しているかを明らかにすることによって、平林における「満洲」体験の意味について、再検討したい。

設列車』から『盲中国兵』へ」、長谷川啓ほか編『戦争の記憶と女たちの反戦表現』、ゆまに書房、二〇一五、三九-四〇頁）。

16　同上、四一頁。

17　アンリ・ルフェーヴル著；斎藤日出治訳『空間の生産』、青木書店、二〇〇〇、七頁。

18　同上、三五-一二二頁。

19　Susan Stanford Friedman, *Mappings: Feminism and the cultural geographies of encounter*, Princeton University Press, 1998, pp.132-150。

2．顕在化する植民地化された空間
――「投げすてよ！」における「鉄道公司」をめぐって

はじめに、「投げすてよ！」に出てくる鉄道公司という空間の意味と機能を分析する。「投げすてよ！」のあらすじは次の通りである。女性主人公光代は、運動で敗北した夫の小村と一緒に大連に落ちのびた。夫の兄が経営する鉄道公司で二人は就職し、小村は中国人苦力の監督、光代は女中となる。しかし、夫は間も無く不敬罪で警察に逮捕され、光代は妊娠しながらも兄の家を追い出され、やむをえず救世軍の婦人ホームに入ってそこで出産した。生まれたばかりの赤ん坊が死んでしまった後、光代はすべてを投げすてようと決意した。鉄道公司のモデルは当時平林が就職した馬車鉄道会社だと推測できるが、作中の兄が鉄道公司の社長であることや、光代が兄の家に追い出された部分はフィクションである[20]。この虚構の部分の様々な登場人物の関係は、鉄道公司の内部空間の配置を通して表現されている。

周知のように、一九〇六年満鉄が大連で設立された後、市街建設は満鉄関東軍都督府と満鉄によって再開され、都市中心部の施設の改造と改修のみならず、市内から周辺への拡張も進んでいる。平林が大連を訪ねた時は、ちょうど「満洲」全域で鉄道建設が徐々に進んでおり、「満洲」の開発鉄道建設時代や競争線建設時代を迎える直前である[21]。この頃、大連の鉄道建設は、すでに十三区間の運行が実現されており、海岸までの星ヶ浦線が白波台（黒石礁）まで延長されている[22]。作品の中で、日本人経営の鉄道公司の仕事は「大連市内から海岸公園まで鉄道を敷くことであった」という。市内中心から周辺へ輻輳する空間の拡大が示唆されているように、大連という符号は帝国日本の支配空間、しかも支配が拡大されつつある空間として記号化されていることがわかる。鉄道公司は帝国の権力が植民地大連という空間に浸透する一つの装置として考えられ、植民地化された空間として顕在的に示されている。

鉄道公司の建物は「古めかしい赤煉瓦の二階建」ての建築物である。二階には兄と嫂が住む。一階には光代が働き住み、同時に日本人雇人と中国人苦力たちも住んでいる。空間

20　当時、満鉄の社員であった山本の兄は山本と平林の大連までの旅費を支援したが、山本が大連まで逃げたことが新聞で報道された後、それを迷惑に感じた彼は二人に「帰ってくれ」と言い出し、山本への援助を拒否した。その後、二人は山本の旧知の酒井少校の助けで、小開一次が経営する敷設中の馬車鉄道に就職し、しばらく小開社長宅に同居していた。たい子が臨月になる時、幸いに大連慈恵病院に施療患者として入院した。（山本敏雄『生きてきた』南北社、一九六四、七〇-七三頁）

21　高成鳳『植民地の鉄道』、日本経済評論社、二〇〇六、一一〇頁。

22　秦源治、劉建輝、仲万美子『大連ところどころ――画像でたどる帝国のフロンティア――』、晃洋書房、二〇一八、一三五-一三六頁。

の配置から見ると、兄夫婦は一般の日本人雇人の上に存在していることがわかる。そして、一階で共存する日本人雇人と苦力たちの間にもヒエラルキーが存在している。

> 小村は、仕事場で覚えてきた汚い支那語で感情の捨場のように、苦力達の暗い室へ首を出しては、つまらない事をののしり、日本人の雇人達は、何ヶ月も給料を払わない主人に互いのくだらない告口（ママ）をしては取り入った。（五六頁）

小村は、兄に対して「卑屈になって」いるが、苦力に対しては「つまらない事をののしり」、苦力たちのいる「暗い室」を感情の捨て場とする。日本人の雇人たちにとって何ヶ月も給料を払われないというのは悲惨な状況であるが、その下におかれた苦力たちはさらに不憫な状況に置かれたと推測される[23]。給料のみならず、日本人雇人の食事が「真黒な南京米」で、苦力たちの食事が「黒栗飯」であることからにもそのヒエラルキーが示されている。日本人雇人たちが階級によって抑圧されているとするならば、さらにその下位に置かれる中国人苦力たちは民族と階級によって二重に抑圧されているといえよう。

女中である光代の仕事は、日本人の食事の準備と嫂の小使いである。彼女の労働は、「両足に激しい水腫が襲」い、心身ともに耐えられない状態になったというように、決して軽いものではない。ここで、階級による搾取が生じていることは他の日本人雇人たちと同様であるが、光代の場合はさらにジェンダーによる問題があることも見逃すことはできない。

> 「お産には、随分金がかかるだろう」
> 「それゃ、あんた、十円や二十円じゃすまないわよ」
> 「不当な負担だな」
> 兄は、例の、変に急いだ声で言った。
> 光代は、その時、嫂が、つぶれた声で、「今のうちに追い出し……」と言ったのを、たしかに聞いたような気がした。
> 光代は肩で呼吸しながら、壁に身をもたせて、こんな時に子供をはらんだ自分をつくづくと嘲った。
> 「何と卑屈な人間どもがうごめいている事だろう」
> 二人の会話を聞いてから、光代は、いよいよたまらないように周囲を見回した。（五五頁）

23　平林たい子は「満洲」で見た中国人苦力について、日本人にばかにされる待遇や、ほとんど賃金をもらっていないという現実を座談会で語ったことがある（「座談会：新満洲国はどんなところか」、『女人芸術』、一九三二・四、二四-四六頁）。

兄夫婦は雇人の出産を不当な負担として、光代を追い出そうと企む。光代の出産には出費が必要であり、さらに出産後は十分な働きが期待できないからだ。作品の後半で描かれるように、小村が逮捕された後、結局光代は兄の家から追い出される。このように、階級によって光代は搾取され、ついにはジェンダーによって排除される対象となる。ここで注目したいのは、光代が住んでいる空間が苦力たちの隣室であることだ。つまり、光代の生存状況が苦力たちのそれと平行に語られていると言えるからだ。

> 火の気のない室でいつまでもベチャベチャと異国語でしゃべっている苦力たちの声に、堪え難い感傷を感じた。（五三頁）
>
> 堪えられない絶望が光代の心を歪めた。（五五頁）
>
> 苦力達は、長いのろのろした辮髪で、のそりのそりと室の中を歩き、黒い栗飯で満腹すると、丈の高い体を長々とねそべって、唇をだらりとあけながら、隣室の光代の所まで聞えて来るふいごの様ないびきをかいた。
>
> 何処にも、この不当な雇用制度や、安価で下劣な植民地気分に反抗するような光をもった目を探し出す事は出来なかった。（五六頁）

鉄道公司の中で、最下層に置かれた苦力たちは被植民者であり、階級と民族によって二重に抑圧される。光代は宗主国の人間であるにもかかわらず、日本人の中で最下層に置かれ、階級とジェンダーによって二重に抑圧されている。二重に抑圧される状況にあって、隣室の光代の「堪えられない絶望」と苦力たちの「堪え難い感傷」が一階の空間で響きあうことが読み取れる。ここでの「不当な雇用制度、安価で下劣な植民地気分」とは帝国日本の支配下における、植民地主義と資本主義による残酷な生存・労働環境のことを指すだろう。「反抗するような光をもった目を探し出す事は出来なかった」というのは、反抗する労働者が滅多にいないことを示す。苦力たちは残酷な生存、労働環境に置かれても、現実を受け入れることしかできない。日本人である光代は兄に対して敵意と嘲笑の心情を抱いても、真正面から声をあげることはできず、心を抑えるしかない。

苦力に対する平林の視線について、従来の論者たちは「投げすてよ！」における苦力についての描写を見落としている。たとえば、竹内実は「施療室にて」の中の「卑屈な苦力」という表現だけをとりあげ、平林の異民族を見下す視線が感じられると論じた[24]。だが、「投げすてよ！」における苦力と光代が併置される描写からすると、日本人の光代と中国人の苦力の状況を単純に差異化することはできない。労働者である光代と苦力たちが受けた抑圧の質は異なるが、前述したように異なる力学が二重に働いているという抑圧のメカニズムは、光代と苦力たちにとってほぼ同じである。

24　竹内実『日本人にとっての中国像』、春秋社、一九六六、三二四頁。

一方、同時代のプロレタリア文学における苦力たちと日本人の関係を描いた作品として、里村欣三の「苦力頭の表情」（『文芸戦線』、一九二六・六）が想起される。この作品の最後の部分に、下級植民者の日本人が苦力頭と交渉する場面が描かれている。主人公である日本人労働者は苦力と言葉が通じないが、苦力の手振りと身振りや主人公の推測によって物語が進められる。最後に、日本人の主人公は飲食習慣の差異で本来食べなかった苦力たちの饅頭を食べられるようになり、「労働者には国境はない」[25]と涙ぐんで悟っている。だが、林淑美が指摘したように、この作品は民族によって生じる「賃金の問題」と「饅頭問題」を＜インターナショナリズム＞という護符によって隠蔽しており、主人公が苦力頭の台詞を推測することによって、下層労働者同士の自然な連帯を示すという試みは、概念としてのインターナショナリズムの層にとどまっている[26]。里村欣三の「苦力頭の表情」と比較すると、平林たい子の「投げすてよ！」は、インターナショナリズム自体を枠づける思想に回収することなく、鉄道公司内部における空間の配置と食物の差異の描写を通して、階級の問題のみならず、里村が隠蔽した民族による下級労働者内部の「賃金の問題」と「饅頭問題」を可視化している。そして、何より重要なのは、作中の平林の自己表象（光代の造形）と民族的な他者表象（苦力たちの造形）を、同じ階の隣という空間に配置する描き方である。フリードマンが指摘しているように、空間には文化的な位置づけを比喩し、歴史的なだけでなく場所的に生み出されたものとして、アイデンティティや知識を示す機能がある[27]。並列する空間に登場する民族的な他者としての苦力は、光代が自己認識を形成する際の重要な参照物としての役割を果たしている。ここで、光代は苦力たちを通して、自分が二重に抑圧されたことを認識した。それゆえ、平林たい子の苦力に対する眼差しは、彼らとの差異を認めながらも、見下す視線ではなく、水平的な視線であると読むことができるだろう。

以上、「投げすてよ！」について、植民地化された空間として顕在化した鉄道公司が、日本人と中国人が接触しあい、民族、階級、ジェンダーによる不均衡な力関係が生じたコンタクト・ゾーン[28]であることを明らかにした。その内部で、複数の要素によって再生産された秩序は、二階と一階の区別、隣室という空間の配置によって示されている。とくに、

25　里村欣三「苦力頭の表情」、『文芸戦線』、一九二六・六、六四頁。

26　林淑美『昭和イデオロギー――思想としての文学』、平凡社、二〇〇五、一一九-一二一頁。

27　同注19、フリードマン前掲書、一三七頁。

28　コンタクト・ゾーン（contact zone）：メアリー・ルイス・プラット（Mary Louise Pratt）が提出した用語である。彼女の定義によれば、コンタクト・ゾーンは異なる文化が出会い、衝突し、格闘する社会空間であり、それは植民地主義や奴隷制（また今日的な世界で存在しているその余波）のような、支配と従属の非常に非対称的な関係性において生じる（Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge, 1992, p.4）。

光代と苦力たちが隣室という空間に配置される描き方には、女性主人公の苦力への他者認識と自己認識が連動していることが示されている。彼女は、鉄道公司での体験を通して、苦力と類似するように、重層的な要素（光代の場合はジェンダーと階級／苦力の場合は民族と階級）によって、二重に抑圧される労働者のアイデンティティを意識し始めた。興味深いのは、女性主人公のみならず、中国人苦力についても、平林は多くの紙面を割いて描いたことである。そこには、資本主義と植民地主義の総合メカニズムの中で、異なる力学によるものでありながら、日本人の女性労働者と中国人の苦力たちが空間の配置によって、響きあうものとして記述されている。ここに、「投げすてよ！」という作品の特徴がある。「投げすてよ！」は、平林の中国人苦力へのまなざしとそれによる自画像を生成する始点である。

3．潜在化する植民地化された空間
――「施療室にて」における「慈善病院」をめぐって

「投げすてよ！」において中国人苦力についての描写に多くの紙面が割かれたのに対して、「施療室にて」では中国人表象がかなり減少する。中国人労働者が出てくる場面は、広場へ向かって走っていく車屋や、争議の失敗で南満鉄道の汽車に乗りこんで去った苦力たちのみであり、作品における重要なトポスである慈善病院の外部におかれている[29]。従来の論では、中国の民衆の問題に立ち入っていないという点が作品の欠点とされた[30]が、両作品の連続性からすると、中国の民衆を登場させない設定は、後述するように、日本人内部の「被植民者」である女性主人公の文化的位置付けを示すためであると考えられる。本節では、日本人によって構成される慈善病院内部の空間に注目したい。

「施療室にて」は、夫（北村）が企てたテロのため投獄され、共犯である妻（「私」）が行路病者票を得て慈善病院に入院し、その半地下室の施療室で出産する物語である。出産した後赤ん坊は、妊娠脚気で濁った乳を飲ませたため、死んでしまう。その後、赤ん坊の死体は解剖室に運ばれ、解剖されてしまった。最後に、「私」は入獄手続きを済ませ、監獄に向かって行く。平林たい子の体験が素材となっているが、悲惨な出産の場面、赤ん坊に濁った乳を授乳する場面や、死体が解剖される場面、監獄に行く場面などの設定は虚構である[31]。

29　慈善病院の内部で、担架を担いだ中国人が死亡室へ行く様子が少しだけ描かれたが、中国人患者は存在しておらず、ほとんど日本人ばかりの空間である。

30　同注２、田中前掲書、二五頁。

31　平林自身は半地下室ではなく、二階でもう一人の施療患者の付き添いで出産を迎えた。赤ん坊は妊娠中の母体の栄養不良でなくなったが、解剖されてはおらず、キリスト教会の人びとの助けで、納棺され、病院の庭の一ヶ所に埋葬された。出院した後、平林は救世軍婦人ホームに身を寄せ、体が完全に回復した後一人で日本に戻った。（同注３、八二-一〇三頁）

山本の指摘によると、「施療室にて」の慈善病院のモデルは、たい子が当時入院した大連慈恵病院である[32]。この病院の前身は一九〇六年に、「満洲」在住のキリスト教有志者によって創設された、貧しい人の救療を目的とした基督教慈恵病院であるが、一九一五年に組織が変更されたため、財団法人大連慈恵病院と改名し、中産階級と無産階級向けの医療機関となる[33]。一九一八年以来、官庁からの補助金があったが、金額が少なく、永久的なものでもないので、病院は実費診療部の収入と民間からの寄付金を頼りにして運営していた[34]。当時の大連における、実費診療機関、無産階級者のための施療機関にあたる社会的医療機関はこの大連慈恵病院のみである[35]。

ここで注目したいのは、モデルである慈恵病院を慈善病院と設定し、その内部の秩序を地上と地下という空間によって分ける描き方である。中風の老婆、娼妓上がりの女性、「私」などの施療患者[36]たちは、一番下の半地下の施療室におかれる。地上の窓口には受付の老人がいる。そして、病院の二階には看護婦長や看護婦たちがおり、有料患者の診察室が設けられている。

これらの空間の配置から慈善病院は日本人内部の秩序を生産する空間として機能していることがわかる。半地下の施療室は「私」と他の日本人女性患者たちの生存空間で、一番低い地位と待遇として配置されている。しかも、「私」は夫の「共犯として出産のすみ次第収容されるべき運命」なので、監視された不自由な人間であり、施療室の自分のスペースは巡査に侵犯されている。さらに悲惨なのは、「私」がそこで動物のように子供を産んだことである。「悽惨な野獣のようなうなり」声で、「誰にも看とられずに野良犬のように」という表現は、命がけで出産に直面する時、「私」が何の介護も得られず、非人間化した状況を示す。

最下層に配置され、監視されたのみならず、動物のように出産した「私」が遭遇した非人道的な状況は、「投げすてよ！」における、日本人の監督の監視の元で「鞭で打たれるようにされて、働いていた」苦力たちの状況に類似する。その意味で、中国人苦力たちを退場させ、半地下室が日本人ばかりの空間である設定は、日本人内部の「被植民者」と同様の「私」の文化的位置付けを示している。図1で示したように、両作品における鉄道公司と慈善病院の空間は、異なる人物が配置されているが、民族、ジェンダー、階級などの複数の要素による厳しいヒエラルキーの空間の秩序が生産されている点はほぼ変わらない。

32　同注20、七三頁。

33　関東庁『大正十四年関東庁管内　社会事業要覧』、関東庁内務局地方課、一九二五、三三-三五頁。

34　倉橋正直「柴田博陽と大連慈恵病院」、『戦前・戦中期アジア研究資料３　植民地社会事業関係資料集「満洲・満洲国」編　別冊』、二〇〇五、近現代資料刊行会、六二頁。

35　大城生「大連慈恵病院の施設及び内容」、『満洲之社会』、一九二二・十、三八頁。

36　施療患者：貧しくて無料で治療を受けている患者である。

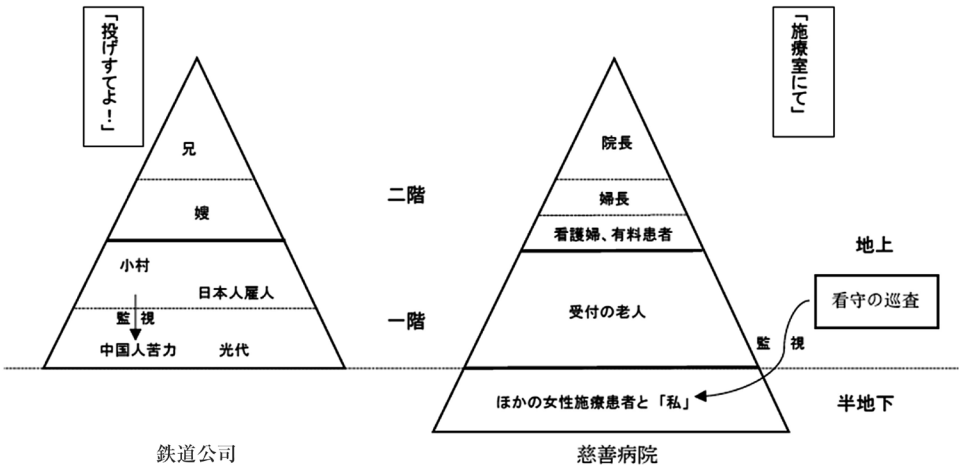

図１　両作品における空間の配置

慈善病院内部のもう一つの空間――死亡室にも注目したい。子供が死んだ後、その遺体は死亡室に運ばれ、解剖された。死亡室については、作中で次のように描かれる。

> 庭の片隅の死亡室。（中略）長い人生の戦いに敗れて、生活の鎖をこの地下室まで引摺り込んで来た人々にとっては、死までの長い間の、施療室の生活よりも、死の最後の一瞬間の、この、解剖台の上での自分を考えることが、一番たえがたい。冷い石の上で、生きていた間の入院料の代りに、手や足をずたずたに切り刻まれてしまう自分に、どうして、あの解剖台の上に掛った一枚の埃だらけの額のような平和な昇天を信じることが出来るか。（一四九頁）
>
> もう解剖が始まる時刻だ。／しかしながら彼等は、人工栄養の金を持たない種類の人間はどうすべきであるかという結論までを、あの可憐な私の子供の死骸の解剖から導き出すことは出来まい。（一五五頁）

死亡室は救済してもらえない施療患者にとって、「死」そのものよりもさらに悲惨な状態を意味している。「死の最後の一瞬間」を解剖台で過ごし、「入院料の代りに」体が解剖されるのは、入院料を払えない施療患者に課された最後の奉仕である。主人公はその空間へ入ったことはないが、死に近い状態の患者が死亡室へ送られた場面を見たことがある。死亡室についての描写は、この後自分の子供も同じような運命に遭遇することを予告している。子供の死骸が死亡室で解剖されることは、子供が母親から奪われ、帝国日本にささげられることを意味する。ここでの死亡室は子供の死体を国家が個人から回収する装置となる。「施療室にて」における母と赤ん坊は「投げすてよ！」における中国人苦力と同じように、帝国の犠牲者となったのである。

総じていえば、慈善病院の地上と半地下の空間配置は日本人内部のヒエラルキーを再生産する機能を持つ。半地下室の施療室は、悲惨な出産を体験した「私」にとって、ほとんどの望みを与えられない闇の世界であり、死亡室は死んだ子供を国家に回収される装置として役割を果たす。動物のように出産した場面や、子供の死体が解剖される設定は、人間としての生ではなく、動物に近い状態の生の状況を示し、国民の中にヒエラルキーを設けて管理することをあぶり出している。「投げすてよ！」における鉄道公司が顕在化した植民地性の表象といえるなら、「施療室にて」における慈善病院は潜在的な植民地性の表象と言えよう。「私」は、「投げすてよ！」の光代よりも残酷な状況に置かれ、身体が監視された点や、階級によって日本人の内部で再序列化され、最下層の位置に置かれた点は、「投げすてよ！」における被植民者の苦力たちの状況に類似する。その描かれ方は、擬似植民地性表象として捉えられ、日本人内部の植民地性が示唆されたものといえる。すなわち、病身の妊婦・産婦である「私」は、日本人内部の「被植民者」であると言っても過言ではないだろう。

4．両作品における空間の移動の意味と機能
―― 女性主人公のアイデンティティの変化との関係性

両作品を連続する物語として読むと、女性主人公の空間の移動の軌跡は次のようにまとめられる。東京から下関へ、そして下関から大連へと移動する。大連の鉄道公司で就職して間も無く、夫が逮捕される。その関係で、彼女は鉄道公司から追い出され、刑務所へ夫を見に行く[37]（「投げすてよ！」）。その後、彼女は慈善病院へ入院し、出産した後、監獄へ向かって行く（「施療室にて」）。

文字通りの意味と比喩的な意味の双方において、人々がどこから来るか、そしてどこへ行くかというのはアイデンティティの構成要素である[38]。本節では、女性主人公の空間の移動を通して、彼女のアイデンティティの浮上、揺らぎと変化のプロセスを分析する。

まず、主人公の運動の中心である東京から、地方へそして大連への移動は、中心から周縁へと排除され、逃げざるを得ない運命を示している。

――彼を振り切って東京へ戻り、全生活を運動の中に投じよう。――／――では、

37　その後、女性主人公が救世軍婦人ホームに入った設定もあるが、田中によれば、この部分の設定は状況を簡潔にするためストーリーを終わらせる可能性がある（同注２、田中前掲書、二〇頁）。平林の実体験では慈善病院に入院してから、救世軍婦人ホームに入ったので、「投げすてよ！」と「施療室にて」を、平林の植民地での実体験を語り直す連続の物語として読む際に、この部分の分析を割愛せざるを得ない。

38　同注19、フリードマン前掲書、一七八頁。

腹の子供はどうする。彼を失って自分の生活ははたして幸福かしら。／光代の心の中には、未だ、浮気な午後の雲の様な、二つの考えが去来しているのであった。（四八頁）

「お前は未だ東京に未練があるんだね」／「東京になぞ、未練はありませんけれど唯……」／光代は面倒くさそうに止めた。／光代は、未だ心の中に、相闘う二つの激しい声をきいた。（四九頁）

大連に旅立つ際に、光代は夫を振り切り、東京へ戻り運動を続けるか、それとも夫と一緒に大連へ行くのかについて葛藤している。ここで、光代の心は動揺しながらも、夫とともに大連に行くことを選び、妻としてのアイデンティティを前面に打ち出した。次に、大連に着いた後、鉄道公司で異民族の苦力たちと同じ場で共存する経験を通して、第２節で論じたように、彼女は日本人の中で最下層化された女性労働者というアイデンティティを意識し始めた。

続いて、大連で夫が逮捕された後、彼女は鉄道公司から追い出され、刑務所へ夫を見に行く（「投げすてよ！」）。この移動の経験は、彼女の妻としてのアイデンティティの揺らぎと変化に大きく関わる。刑務所で夫と面会するとき、夫は自分が「社会運動家であるよりも、平凡な、恋愛至上主義者だ」と残念な気持ちで彼女に言う。しかし、夫のこのような考え方に対して、光代は「ふしぎに涙がこみ上げて来るのを感じた」。この場面では、光代の小村を求める感情ははっきり示されないが、彼女の「ふしぎに涙がこみ上げて来る」姿から見れば、光代と小村の理念の違いが浮上してくる。

その後、彼女は行路病者票を得て慈善病院に入院し、入院した後、また憲兵隊で拘束されている夫の面会に行く（「施療室にて」）。その場面で、夫は涙ながら「生まれる子供とお前に、俺は一番すまなく思うよ」と言う。「施療室にて」における夫の妻に対する感情について、小原は夫が妻に「同志」の感情を要求するより、まず妻であることを要求すると指摘している[39]。この解釈は、子供が生まれる前の場合なら適当であるが、子供が生まれた後は、そのような感情は変わっていると思われる。「生まれる子供とお前に」というように、子供が生まれた後、夫は妻をまず母であると見なし、次に妻と見なす。今回、夫は同志の話をしていない。しかし、妻は夫に対して、「夫ではない。同志だ。」と考える。ここで、妻は夫をまず同志として、次に夫と父と見なす。

夫と考えるからこそいろいろな不満が引摺り出される。××と××を前にした、同志としての男女関係に、あの頼りない一本の綱に皆が縋ろうとする古い家族制度は去年の雑草のように枯れている筈だ。（一四四頁）

39　同注８、小原前掲書、七一頁。

愛する同志よ、周囲を見回すな。前を見よ。前を見よ。深い天井に描いた彼の幻影に呼びかけて見る（一四五頁）

つまり、女性主人公は夫を見に行くたびに、夫に対する同志としての感情が強くなるが、夫は女性主人公に対する母、妻という「古い家族制度」に縛られた関係性のみを求め、彼女を同志へとみなす感情が弱まっていく。前後の二つの場面を通して、次第に闘争の意志が強くなる妻と闘争の意志が弱くなる夫という非対称的な人物像が描かれていく。妻が夫を見に行くという空間の移動は、女性主人公の妻としてのアイデンティティが弱くなり、運動家というアイデンティティが次第に強くなる[40]要素として機能する。

その後、慈善病院の施療室という窮屈な空間に閉じ込められる女性主人公は、悲惨な出産体験を通して、第３節で示したように、日本人内部の「被植民者」のような、最も差別された状況に遭遇した。この空間で、女性主人公は母としてのアイデンティティが揺らぎ、結局母というアイデンティティを捨てようとする。そのきっかけは、牛乳さえもらえず、絶望した女性主人公が自分の乳を子供に飲ませ、結果的に子供を殺すことになるのを決意する時である。

子供に授乳する決意と子供の死の意味について、先行論には女性主人公の戦いの敗北だと解釈される論[41]や、それは「感情の発露」や「家父長制的支配に対する怒りの表明」ではなく、やむを得ない判断と主義と感情の葛藤に苛まれる「私」の状態の「説明」である解釈[42]などがある。しかし、後述するように、その行為の意味は新たな闘争の始点ではないかと考える。「投げすてよ！」と連続的に読めば、大連を立つ前に、下関の町で見かけた「真赤に彩られた堕胎の画」や、「何でもない顔で堕胎の決心を話す」光代の描写などは、すでに主人公が子供を下ろす可能性を示し、「施療室にて」で自らの手で子供を犠牲にする伏線として与えられていると思われる。「子供への愛が深いならば、深いが故に、闘いを誓え」という表現に示された、救えない子供を死なせる決意には、子供への愛を闘争の力に転化する主人公の強い意志が読み得るだろう。この出来事は、女性主人公が母、妻から女性闘士へ変身する契機となる。すなわち、施療室は女性主人公が女性闘士となる新たな闘争の始点ともなるのである。闘争のために、自らの手で子供を犠牲にする母親の造形

40　女性主人公の夫に対する愛情の関係への意識が変化することを通して、運動者としてのアイデンティティが立ち上がる過程について、石川論においても指摘されている（同注９、前掲石川論、六一-六二頁）。本稿で注目するのは、そのアイデンティティが立ち上げられる過程において、女性主人公の空間的移動が構成要素として機能する問題である。

41　壺井繁治「平林たい子論」（Ⅲ）、『新日本文学』、一九五二・五、一〇六頁。そのほか、西論においても、同じ観点を示した（同注10、前掲西論、一一三頁）。

42　同注12、倉田前掲論、八-九頁。

は、近代家父長制が内包されたジェンダー制度を撹乱する[43]一方で、母を産む装置とする帝国主義の論理も覆す。

最後に、死んだ子供が死亡室へ運ばれた翌日、「私」は入獄の手続きをすませ、病院から出て監獄へ向かって行く。作中で、監獄は主人公の記憶と想像によって展開され、物語の最初から最後の部分までを貫く場所となっている。作中の監獄は「私」が妊娠に気づき、子供を育てようと思った場所、夫がいる場所、自分が出産の後収容される場所など、様々な意味を持つ場所である。最初に、妊娠に気づいた女性主人公「私」にとって、監獄は子供と夫との関係を繋ぐ場所である。一方、監獄という場所について、「私」は恐れを抱いており、夫が逮捕された後、自分も入獄が決まっている事実に対して当初は萎縮している。しかし、子供を殺した後の「私」が、何の躊躇もせず、監獄の方に向かって行くと決意した時、監獄は子供を孕み、育てる場所ではなく、闘争する場所へと書き換えられている[44]。「監獄の表門だ」という結語は、女性主人公の決意を示したものであり[45]、反勢力の姿勢を明確に打ち出した表現である[46]。女性主人公が監獄に向かって「行く」という動的なプロセスの表象は、最初の「監獄を恐れる」心理描写や、「出産のすみ次第収容されるべき運命」という受動的人物像とかなり離れており、運動の中心に戻ろうとする主体が浮かび上がってくる。この時、女性主人公は運動者の妻という従属的な身分ではなく、子供を監獄で育てようとする母でもなく、社会主義者としての女性闘士に生まれ変わる。つまり、病院から監獄へという空間の移動は、彼女が妻と母のアイデンティティを捨て、最後に女性闘士になることを示している。

中心から周縁へ、自由に行動できる広い空間[47]から行動が制限された狭い空間（施療室）へ、最後に病院を出て監獄へ行くという移動の軌跡は、女性主人公が運動家の妻から、最下層化された女性労働者・病身の妊婦へ、そして子供を殺す母を経て、さらに闘争する社会主義者の運動家となるというアイデンティティの構成要素として機能し、その揺らぎと変遷のプロセスを示している。つまり、主人公の空間の移動の描写は彼女のアイデンティティの生成と変化に連動しているのである。

43　同注11、フローレス前掲論、三一-三二頁。

44　副田によれば、プロレタリア文学における＜獄中＞には「覚醒」と「闘争」の場という意味がある（副田賢二『＜獄中＞の文学史――夢想する近代日本文学』、笠間書院、二〇一六、二二七頁）。

45　駒尺喜美「施療室にて＜平林たい子＞」『國文学：解釈と教材の研究』、學燈社、一九六八・四、五四頁。

46　同注2、田中前掲書、三〇頁。

47　鉄道公司にいた頃、彼女はまだ鉄道建設の現場など外部へ行けるように、ある程度自由に移動できると言える。

5．おわりに

以上、本稿は「投げすてよ！」と「施療室にて」を連続する物語として取り上げ、両作品の中の空間に着目し、空間の配置のしかた、空間の文化的な象徴の意味、物語の生成における空間の機能の分析を通して、顕在化／潜在化する植民地化された空間に示された、女性主人公の文化的位置付けと空間の移動に伴う女性主人公のアイデンティティの生成、揺らぎと変化の過程を明らかにした。

両作品を連続的に捉えると、女性主人公の「満洲」体験についての描写から、植民地化された空間における、被植民者である中国人苦力と「被植民者」である日本人の女性主人公がともに浮かび上がる。その描き方は、従来の宗主国の人／被植民者、男性／女性のような二項対立的構図を超え、日本人の内部の差異と分断、下層労働者階級における日本人と中国人苦力の差異、異なる力学が二重に日本人女性と苦力たちに課した抑圧のメカニズムの類似性などを示し、より複雑で、多様な構図となっている。

自己の「満洲」体験を語るとき、民族的な他者としての苦力と日本人である女性主人公を平行に描き、彼らへの認識を自己認識と連動していることは、平林たい子の「満洲」体験の語り直しの特筆すべき点である。女性労働者がジェンダーと階級による二重に抑圧される状況は、苦力たちの民族と階級による二重に抑圧される状況と響きあい、女性主人公の日本人内部の「被植民者」という文化的位置付けを示す始点となる。また、「満洲」体験における空間の移動に伴い、女性主人公は従属した運動家の妻、母であると同時に、最下層された女性労働者、日本人内部の「被植民者」であるアイデンティティを意識し始め、施療室での経験を通して、日本人内部の「被植民者」という文化的位置付けが次第に浮上してくる。複数のアイデンティティが同時に存在する一方、とくに妻、母というアイデンティティには空間の移動によって、揺らぎが生じており、最後に、女性主人公は妻と母というアイデンティティを捨て、近代帝国主義と家父長制が内包された女性ジェンダー役割を逸脱して、「被植民者」に位置づけられた状況を覆すことを目指す女性闘士となる。その過程において、公的な領域における労働者の問題と私的な領域における母や妻との問題という異なる力学が、日本人内部の「被植民者」という植民地性のレトリックで統合され、問題化されていく。

G.C.スピヴァクは「サバルタンは語ることができない」と明言し、知識人の役割は彼らを表象＝代表（代弁）することだと主張する[48]。読み書きのできない苦力たちは民族と階級によって、無言、沈黙を強いられる状況に置かれ、帝国のサバルタンとして語ることは

48　G.C.スピヴァク著；上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』、みすず書房、一九九八、一一六頁。

できない。日本人の女性主人公は一応語ることはできるが、彼女自身の声を聴く人はいない[49]。それゆえ、両作品における苦力と日本人女性主人公は、共に帝国のサバルタンの地位に置かれていると考えられる。平林は「投げすてよ！」の中で、苦力たちの哀しむ声を発見し、彼らと水平する水準で日本人女性主人公を造形し、さらに「施療室にて」で、苦力の状況に類似する最下層された「私」を女性労働者・妻・母から社会主義者の女性闘士になる女性主人公を造形した。そこには、帝国という枠組の中で犠牲にされ、排除されたサバルタンたちの嘆く声を拾い、彼らを代弁する平林の立場が読み取れるだろう。この意味で、「投げすてよ！」と「施療室にて」は私性の強い、平林たい子の自己語りというより、民族とジェンダーを超えた、下層女性労働者や苦力を含めたサバルタンたちのための作品ともいえよう。彼女の作品には、サバルタンたち内部の差異が承認されながら、重層的な力学に抑圧される彼らのために闘争する意志が含まれている。

ジュディス・バトラーは、人間は社会的に生き、常に他者の手に委ねられており（「生の危うさ」）、人間の生は、まず生として尊重され、その尊重によって維持される（「悲嘆可能性」）ことこそが生の前提であるという[50]。平林たい子は自分の「満洲」体験を語り直す時、自分の生のみならず、他者の「生のあやうさ」も感知することによって、承認できない生の有様を可視化した。彼女の「満洲」体験物語は、「悲嘆可能性」が不平等に割り振られている枠組自体を問い直し、民族・階級・ジェンダーという複眼的な視点を有する女性作家のサバルタン的な書き直しである。一九二〇年代の「満洲」体験は、平林たい子が民族とジェンダーを超え、サバルタンたちの生存状況に関心を寄せる契機であり、その後の植民地におけるサバルタンたちの物語[51]を創作する原点とも言えよう。そこに、同時代のコンテクストにおける平林の「満洲」語りの特異性がある。

【付記】

本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：18J13050）の助成による研究成果の一部であり、2019年度日本社会文学春季大会（於早稲田大学、2019.6.30）での口頭発表に基づくものである。会場の内外で貴重な意見を賜った方々に感謝申し上げる。本論文における「投げすてよ！」と「施療室にて」の本文の引用は、それぞれの初出である『解放』（一九二七・三）と『文芸戦線』（一九二七・

49　その例として、両作品における彼女の絶望的な心理描写や、彼女が結局書きかけた手紙を出せなかったことなどの場面が列挙できる。

50　ジュディス・バトラー著、清水晶子訳『戦争の枠組み――生はいつ嘆きうるものであるのか』、筑摩書房、二〇一二、二四-二六頁。

51　この二作を発表した後、平林たい子は、「施療室にて」の延長線として、苦力、日本人、白系ロシア人などの下層階級の人々が病院という空間で登場させる「M病院の幽霊」（『若草』一九二九・九）や、被抑圧者の連帯をも視野に入れて苦力たちの声を可視化した「敷設列車」（『改造』、一九二九・十二）などの作品を発表した。

九）による。引用に際し旧体字、旧仮名を適宜現行のものに改め、頁数を示した。引用内の「／」は改行を、「(中略)」は中略を示しており、小説本文の下線は筆者によるものである。本論文における「満洲」は歴史用語として用いるものである。

キーワード　平林たい子、「満洲」、空間、植民地化、アイデンティティ

（YANG Jiajia）